

平成 28 年度研究助成 研究実績報告書

代表研究者	佐野 恭子
研究テーマ	脳損傷者の表情認知と表出の特徴から他者との良好な関係づくりに向けた方略を考える

<助成研究の要旨>

【背景と目的】

認知コミュニケーション障がいとは言語機能の障がいではなく、内容、話し方、表情、身体の動き等を状況や相手の意図に応じて用いることの障害であり、このために対人関係に困難を来す者が少なくない。

本研究では、非言語コミュニケーションの1つである「表情」に着目し、①脳損傷者の表情認知と表出の特徴を家族や他の健常成人と比較すること、②脳損傷者の表情認知と前頭葉機能および全般性知的機能のスクリーニング検査との間に関連があるか否かを確認することを目的とする。本研究を通して、認知コミュニケーション支援につながる情報を得たい。

【方法】

1. **対象**：脳損傷者、脳損傷者の家族（主介護者）、主介護者以外の健常成人、各4名（計12名）。

<研究対象者の選定方針>

- ・脳損傷者—病気や事故による脳損傷後遺症を有し医学的に状態が安定した、成人で在宅の高次脳機能障がい者（意志疎通に困難を来さず著明な失語や精神症状を有する者は除外）。
- ・脳損傷者の家族（主介護者）—日常的に上記脳損傷者との関わりが多く、症状をよく知る者。
- ・健常成人—脳損傷者に近い年齢層の成人。脳損傷者と家族のいずれとも面識のない者。

2. **手続き**：以下の通りとした。

- (1) Ekman (1971) の基本6感情（幸福、驚き、恐れ、嫌悪、怒り、悲しみ）を「最も表す」と研究対象者自身が感じる表情と無表情、計7種の画像を、デジタルカメラで撮影した。前6種の画像にモーフィング（2つの画像を合成させ中間状態を作る）を施し、元の表情と無表情の中間にあたる画像も作成した。
- (2) 脳損傷者には5種の神経心理学的検査（所要時間50～80分）、家族には脳外傷の認知—行動評価尺度TBI-31（久保ら、2007）を実施した。
- (3) 研究対象者一人ひとりに全ての画像（6種×2段階＋無表情2枚）×12名分を無作為に呈示し、画像が表す感情の選択（6種、無感情）を求めた。
- (4) 脳損傷者、主介護者、健常成人のそれぞれにおける画像と感情の一致数を、全体、人物別、画像（表情）別に算出し、傾向の観察と考察を行った。また、脳損傷者自身が「最も感情を表す」として撮影を行った画像に対する本人以外の回答も確認した。
- (5) (2) の評価結果と (4) の結果との関連性を個別に、また俯瞰的に観察した。

【結果】

1. **対象者の概要**：内訳は、脳損傷者4名（30歳代男性1名、同女性1名、20歳代男性1名。全員独歩可能、無職）、脳損傷者の主介護者4名（50歳代2名、60歳代2名。全員母親）、健常成人4名（30歳代男性2名、同女性1名、50歳代女性1名）であった。

2. **表情認知課題の結果**：概略のみ記す。

1) 正答数の比較

- ①**全体の正答数**：平均は、脳外傷者67.8、主介護者76.5、健常成人86.5であった。Kruskal-Wallis検定の結果、3群に分けた要因全体の主効果は有意であった（ χ^2 値=7.90、 $p<.05$ ）。事後検定（Steel-Dwass法）では有意な群間差を認めなかった。
- ②**表情別の正答数**：Kruskal-Wallis検定および中央値検定の結果、嫌悪（修正 χ^2 値=9.51、 $p<.01$ ）、怒り（同=12.79、 $p<.01$ ）、悲しみ（同=6.55、 $p<.05$ ）で要因間に有意差を認めた。

2) 神経心理学的検査の結果等との関連

脳損傷者の表情認知課題の結果から、正答数以外にも多くの特徴が観察された。なお、神経心理学的検査の結果、および主介護者による認知・行動障害の程度との関連は明らかではなかった。

3) 本人以外の対象者による表情認知

脳損傷者3名の表情に対する正答数は健常成人とほぼ同様であった。

【考察】簡潔に記す。

脳損傷者は、表情認知全般、および否定的感情を示す表情の認知においてそれぞれ異なる傾向を持つ可能性が示唆された。後者は、他者の否定的感情を表情から適切に解釈できないという認知コミュニケーション障がい的一面を反映していると考えられた。また、脳損傷者一人ひとりの回答や反応には、神経心理学的検査では見出せない特徴が多く見られた。対象者を増やして、より安定した情報を得る必要がある。